

A Concise History of Japanese and Western Architecture

建築史編集委員会 編著

コンパクト版 日本・西洋 建築史



❖
「建築史」編集委員会

大橋竜太
(東京家政学院大学准教授)

平山育男
(長岡造形大学教授)

溝口明則
(名城大学教授)

❖
執筆分担

大橋竜太
(第2部、第3部、第4部)

平山育男
(第1部Ⅰ、Ⅳ、Ⅶ、Ⅷ、Ⅸ、Ⅹ、Ⅺ、Ⅻ)

溝口明則
(第1部Ⅱ、Ⅲ、Ⅴ、Ⅵ、3D画像製作)

はじめに

本書は建築を学ぶ入門者の教科書として編纂された。建築文化を十分に理解するのはたやすいことではない。それは、建築は建てられた時代や地域によってさまざまな種類があり、また、構造・工法によっても大きく異なっているからである。これら多様な建築の文化と歴史を理解するための最低限の基礎知識を、できるだけわかりやすく、短い文章でまとめたのが本書である。

古今東西にまたがる種々の建築を学ぶためには、体系的な学習が必要となる。そこで本書では、「第1部 日本建築史」「第2部 日本近代建築史」「第3部 西洋建築史」「第4部 西洋近代建築史」に分け、まずは身近なわが国の建築の流れを学び、次に、それらに大きな影響を与えた諸外国の建築の歴史を学ぶ構成とした。ここで、諸外国の建築として西洋建築しか取り上げていないのは視点が偏っているのではないかという意見もあるかもしれない。しかし、ヨーロッパ大陸を中心に展開された建築の歴史は、単なる一地域で起こった建築の現象にとどまらない、現代建築の源流となる建築の発展過程であり、また先達がわが国の近代化を図るはかるうえで学んできた建築でもある。世界の建築は、各地に土着の建築を含めて、計り知れないほど多種多様であり、それらすべてを1冊の本にまとめることは困難である。そこで、世界の建築の歴史的な流れとして知っておいたほうがよいと思われる建築のみを取り上げるにとどめるしかなかった。本書で取り上げることができなかった建築にも、すばらしい建築は多数ある。こういった建築については、もっと詳細に書かれた専門書をあたっていただきたい。

建築史は奥が深い。いくら勉強しても、世界の建築の一部しか知ることができない。だが、それがまた魅力でもある。本書がきっかけとなり、古建築の魅力を知り、もっと深く建築史を探究するようになっていただければ光栄である。そして、身近にある歴史的建造物を大切に先達の功績を将来につないでいていただければと考える。そうなれば、われわれの未来の建築環境は、すばらしいものになることであろう。

2008年12月

「建築史」編集委員会

コンパクト版 建築史
[日本・西洋]
目次

はじめに	003
第1部/日本建築史	008
I 竪穴式住居と高床式建物	010
II 古代の神社建築	012
III 仏教建築の伝来	014
IV 古代の都市計画と住宅	016
V 浄土教の建築	018
VI 中世の仏教建築	020
VII 中世の神社建築	024
VIII 中世の住宅から書院造へ	026
IX 城郭建築	028
X 茶室と数寄屋	030
XI 近世の寺社建築	032
XII 民家	036
第2部/日本近代建築史	040
I 西洋文化の移入	042
II 日本人建築家の誕生	044
III 様式建築の展開と新しい様式の模索	046
IV 都市計画および構造技術の発達	048
V モダニズム建築の到来	050
VI 戦災復興から高度成長期にかけて	054
VII 戦後の住宅政策とDK住宅の誕生	056
VIII 日本建築界からの発信	059
IX モダニズムの先を求めて	062
第3部/西洋建築史	064
I エジプト建築	066
II オリент建築	068
III ギリシア建築	070
IV ローマ建築	076

V 初期キリスト教建築	080
VI ビザンティン建築	082
VII イスラム建築	084
VIII ロマネスク建築	086
IX ゴシック建築	090
X 中世の世俗建築	094
XI ルネサンス建築	096
XII バロック建築	102
XIII リヴァイヴァル建築	108

第4部/西洋近代建築史	112
I 新材料を用いた構造物	114
II 都市問題・住宅問題	116
III アーツ・アンド・クラフツ運動	118
IV アール・ヌーヴォー	121
V アメリカ建築の近代化	123
VI セセッション	125
VII 鉄筋コンクリート造建築の登場	128
VIII ドイツ工作連盟	130
IX 近代建築運動	131
X モダニズム建築の完成と流布	134
XI アール・デコとスカイスクレイパー	141
XII 第二次世界大戦後の建築	142
XIII ポスト・モダニズム建築	144

付録1 歴史的建造物の保存	146
付録2 建物を調べよう	149

あとがき	153
図版出典リスト	154
索引……建築家ほか	158
索引……建築	161
索引……建築用語	164

II 古代の神社建築

初期の人類は、自然現象の中に多様な、超越的な存在を感じ、それらを信仰の対象とした。日本においては神道の神々がこれに相当する。このような信仰は発生の契機がそれぞれ固有の土地に結びつけられた地祇の性格をもつ場合が多かった。特定の聖地と特定の神が結びつく様相は、宗像神社や厳島神社、大神神社、諏訪神社などに見られ、いずれも聖地に相対した斎場を設けていた。現在の拝殿や遷拜所は、発生当初の様相を色濃く残している。現在の春日大社本殿のある位置も、三蓋山を神体とする斎場であったと考えられている。

社殿が成立する過程は難解だが、貴重な宝物などが神体や依代と見なされ、これを安置する建築が求められたためと推定されているが、高床式の倉庫などに基づく神殿が成立するのはこのためであろう。またそればかりでなく、建築自体が神の象徴として機能した可能性も指摘されている。

一般に、社殿は仏教建築が導入される以前の素朴な日本建築を伝えてきたと考えられているが、その日本的形態に対す

る自覚は、かえって仏教建築の導入によって喚起されたと考えなければならない。

たとえば、20年ごとに社殿の建替えを繰り返す伊勢神宮(①)の式年造替は、きわめて日本的な特色を示すものに違いないが、同時に1000年を優に超える耐用年限をもつ大陸伝来の仏教建築の影響を受け、わずか半世紀に満たない寿命の掘立柱の建築を、長期にわたり継続させていくための巧妙なシステムと見るべきものである。

同規模、同形、同様式を忠実に守りつづける造替は、反対項に寿命の長い仏教建築をおくことで、はじめてその意図が鮮明になる。また、多くの社殿が掘立柱から礎石柱への移行を果たし、丹塗や金属装飾を取り入れていったのは、大陸伝来の、建築の寿命を大幅に延ばす新技術を導入したためである。しかしその導入の仕方は限定的で、また遺構ごとに特徴がある。

日本固有の建築の姿は、大陸の新技術に接触し、影響を受けることで自覚されたのである。



①伊勢神宮正殿(三重県伊勢市)

日本のままの部材と棟持柱をはじめ掘立柱をもち、簡単な切妻屋根を載せるなど、大陸の技術からもっとも古い伝統の姿を継承している。素朴な技術を残した結果、建築の寿命は短いが、定期的に建て替えることで古式を継承している



②出雲大社本殿(1744・延享元年、島根県出雲市)

1744年に建立された現在の出雲大社本殿は、礎石柱と屋梁をもつ屋根を載せており、大陸の新技術の影響が見られる。しかし棟に達する妻の柱や高く張られた床、巨大な切妻屋根などに伝統の姿が継承されている



③春日大社本殿(1863・文久3年、奈良市)

屋梁をもつ切妻屋根を載せ、軸間に丹塗をほどこしている。これらは大陸の技術の影響を受けたものだが、井桁の土台の上に柱を立てて高床を張る構成は、日本古来の姿を伝えている

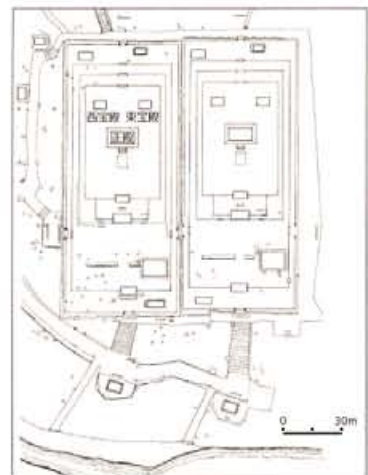
④住吉大社本殿(1810・文化7年、大阪市)

内部空間を前後に区分すること、そして直線的に貫き下ろす切妻屋根の構成は、伝統的な日本建築の姿を残している。しかし現在の本殿は礎石柱を用い、軸間に丹塗をほどこすなど、渡来技術に限定して導入している点も見逃せない

Close-up

式年造替で生き残る—伊勢神宮内宮正殿

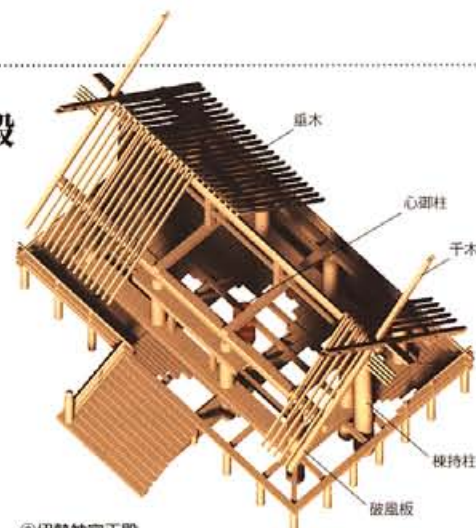
伊勢神宮正殿の建築は掘立柱を用い、棟持柱をはじめ各所に素朴な木造構法の痕跡を残しているが、伽藍の構成は、正殿を中心に、門や宝殿などの付属施設が整然と左右対称に配置されている(①)。奥行の深い独特の伽藍だが、仏教建築の影



①伊勢神宮内宮式年造替の敷地
伊勢神宮内宮の敷地。二つ併置した敷地に、20年ごとに交互に建替えを繰り返す

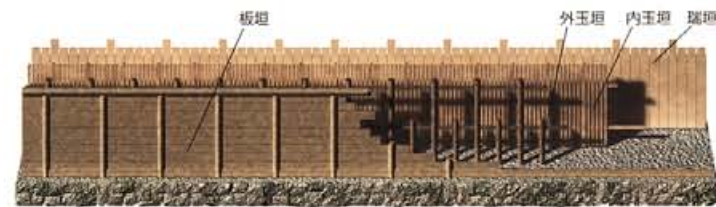
響の中で成立したものであろう。

正殿、宝殿が平入の構成をとる(②)原因も、伽藍の左右対称の構成と深く関わっているようである。対称性を意識した構成は、素朴な木造構法を守りつづけた姿勢と対比される、注目すべき特徴である。



②伊勢神宮正殿

棟持柱をもつこと、千木と破風板が一木であること、左右の千木と破風板が交差しつつ厚みの分ずれていること、垂木の配りが正背面で位置をずらすことなど、細部の納まりは、素朴な構法を用いていた初期の木造建築の様相を各所に残している



③伊勢神宮正殿の玉垣・瑞垣

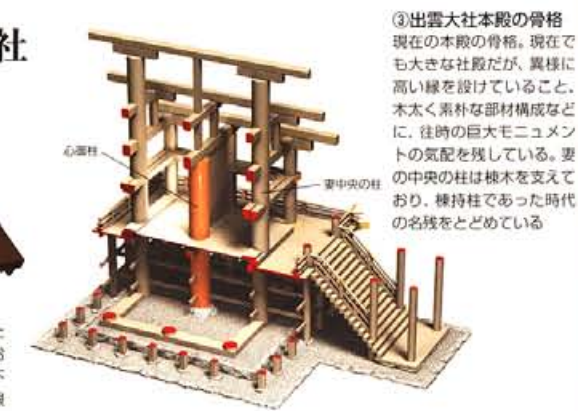
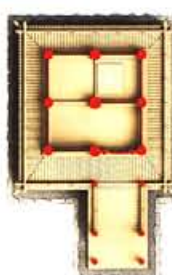
正殿は4重の垣で厳重に囲まれる。内から順に「瑞垣(みずがき)」「内玉垣(うちたまがき)」「外玉垣(とのもたがき)」「板垣(いたがき)」である。位置により透過度に大きな相違がある

モニュメントとしての社殿—出雲大社



①復原された出雲大社の前身建物

出雲大社が巨大であったとする文献史料に基づいて、福山敬雄氏は複数の推定復原案を発表している。上図はその一つ。豪壮で巨大な往時のモニュメントの姿が浮かび上がる。前庭の構成によるのではなく、建物単体で巨大さを目指したことや各所の非対称の構成などに、まだ部族国家が乱立していた時代の素朴な建築表現の特徴が現れている



③出雲大社本殿の骨格

現在の本殿の骨格。現在でも大きな社殿だが、異様に高い縁を設けていること、木太く素朴な部材構成などに、往時の巨大モニュメントの気配を残している。妻の中央の柱は桃木を支えており、棟持柱であった時代の名残をとどめている

②出雲大社本殿の切妻屋根

現在の屋根形状は屋梁をもち、棟上に置千木(おきちぎ)を載せている。おそらく当初の屋根は、直線的に貫き下ろしていたであろう。このような屋根形状も仏教建築の影響によって現れた

方2間、妻入の構成は、さまざまな非対称の構成を生み出す原因になっている。階が一方に寄り、神座へいたる本殿内部の動線は、内法高さまでしかない中央の「心御柱」をめぐるように屈曲する。

正背面の妻の2本の柱は、柱筋が外に踏み出しており、棟持柱の痕跡を残していると考えられているが、この中央の柱筋が建物内の複雑な動線を生む原因になっている。

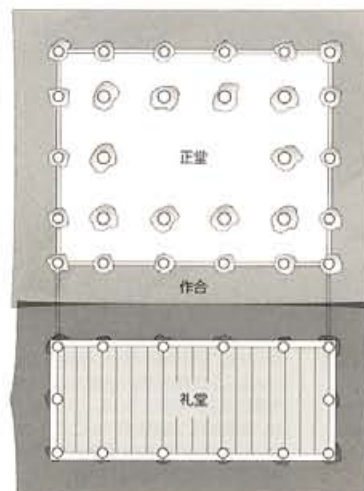
VI 中世の仏教建築

大陸との接触を断っていた平安時代、寺院建築は伽藍の中心を占める記念碑的な建築と並行して、「行」を行う道場としての仏堂を発展させた。これらの仏堂は、仏教建築としては比較的簡素な施設であるが、床を張り縁を設け、扉戸を吊るなど、住宅建築の影響を強く受けるようになる。さらに、密教修法を契機として、正堂の前面に礼堂を設ける双堂(1)を生み出した経験は、奥行の深い堂内を、格子戸などの柱間装置を用いて外陣、中陣、内陣、後陣などに複雑に区分するようになる(2)。中世の仏堂は、古代の和様仏堂を簡素にしたとも見え、さほど相違のないよく似た外観をもつようにも見えるが、内観を見れば、仏堂という概念そのものが、長い時を経て劇的な変化を遂げてきたことが理解される。この様相は古代末頃、数次の改造を繰り返して深い奥行を獲得していった当麻寺本堂(3)の変遷に現れている。

一方、古代末頃にいたり、大陸との交流が再開されると、新たな様式がもたらされることになった。「大仏様」(次頁)と「禅宗様」(P.22)である。「大仏様」は、後醍醐天皇によって、

被災した東大寺の再興に採用されたが、中世の和様建築に影響を与えながらも、独立した様式として広がることはなかった。これに対し「禅宗様」は、禅宗の隆盛によって各地の禅院の施設、仏殿、法堂、三解脱門などで繰り返し採用された。これら二つの様式をまとめて「第2次渡来様式」と称する。組物や横架材など、和様と比べて構造上の発達が顕著であり、それぞれ中世の和様建築に大きな影響を与えた。頭貫や組物に木鼻が付くようになり、長押の背後に、隠れるように貫が挿入される点などは新様式の影響であり、中世の和様が古代の和様と顕著に異なる特徴の一つである。

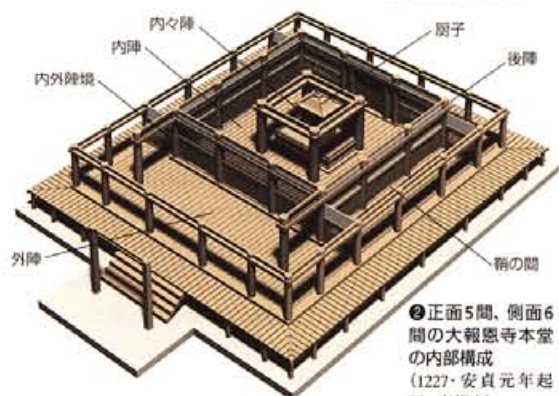
中世は、建物の細部に新様式を積極的に採用した折衷様(P.23)なども生み出した。複数の様式が乱立する時代であったが、新様式の建築は少なく主体はあくまで和様であった。新様式は、いずれも和様仏堂の細部に大きな影響を与えたが、禅宗様を用いた安楽寺八角三重塔(鎌倉時代末頃)を現存する唯一の例外として、塔には様式として大きな影響を与えることがなかった。



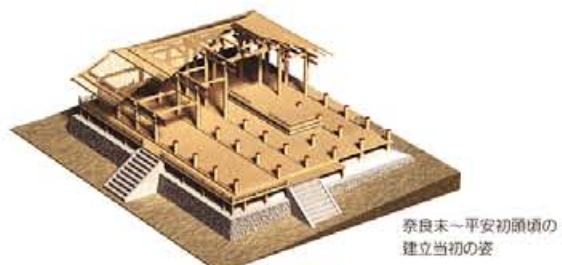
①双堂平面

仏堂の前面に別棟の建物を設け、一つの施設として用いたものを双堂と呼ぶ。双堂では仏堂を「正堂」、前面の施設を「礼堂」と呼ぶが、これは密教の修法が契機となって現れた。正堂は土間のままとし、仏壇を設け、本尊を設置するが、礼堂は床を張ることを通例としていたようで、既存の仏堂の前に、後から礼堂を設けた例が多い。山腹の狭い敷地に建てられた観音堂の前面に、後になって斜面に礼堂を建てる例も多く、懸造(かけづくり)を生み出すことになった。奥行の深い仏堂をつくらうとする動向は、中世にいたって新たな形式の仏堂を生み出す素地となった。中世仏堂が古代の仏堂に比べ奥行の深い平面をもつようになるのは、双堂などの経験を経たためである。

正堂：単独なら通例の仏堂と相違がない。内部は土間のままとし、中央に仏壇を設ける
作合(つくりあい)：二つの建物の軒下空間。本来は外部空間である
礼堂：通例は床を張る



②正面5間、側面6間の大報恩寺本堂の内部構成(1227・安貞元年起工、京都市)



奈良末—平安初頭頃の建立当初の姿



永暦2年改造後の姿



現在の姿

③当麻寺本堂の変遷(平安初頭頃・1161・永暦2年、奈良県葛城市)
当麻寺本堂(曼荼羅堂)の変遷は、奥行の深い中世の仏堂が生まれた契機を端的に物語っている。この本堂は、奈良時代末から平安時代初頭頃に建立された。当初、正面5間、側面2間の身舎の四隅に庇をめぐらし、さらにその前方に前庇を加えて深い奥行を獲得していた。しかし1161年に大改造が加えられ、正面5間、側面2間の身舎の前面に、やはり側面を2間とする身舎を加え、この四隅に庇をめぐらす形式に発展した。その結果、仏堂の奥行は、前庇を加えた当初の5間からさらに拡大し6間となった。この建物の骨格は、鎌倉時代の仏堂の形式を先取りしたもので、中世の仏堂の考え方をよく示した遺構である。

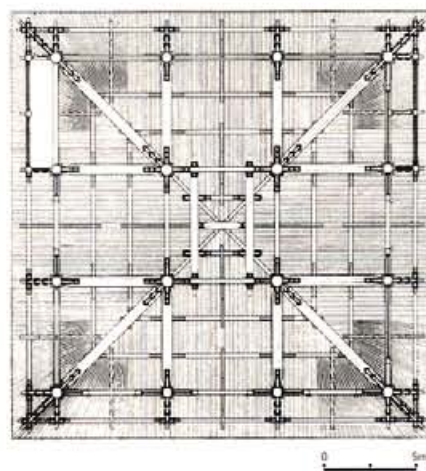
Close-up

大仏様の建築—浄土寺浄土堂



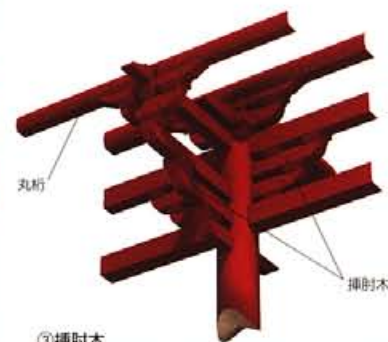
①浄土寺浄土堂内観

(1197・建久8年、兵庫縣小野市)
重厚な柱と梁で構成された力強い架構は、よく組み上げられた構造体が、ただちに建築美を生み出すことを表している。組物は柱の側面から生えたと飛び出し、太い梁を支持するが、これは大仏様に固有の架構法である。



②浄土寺浄土堂見上

方1間の身舎構造の中央に円形基壇を構え、脇侍とともに巨大な丈六の阿弥陀像を安置している。垂木が並ぶ屋根裏の下に、梁と束で組み上げた力強い架構を見ているのが浄土堂の最大の特徴である。



③挿肘木

大仏様の組物は柱上に載らず、柱の側面に仕口を刻んで肘木を挿し込むという、特徴的な架構法をとっている。そのため相対的に柱が太く、大仏様独特の力強さと細部の繊細さを生み出す原因になっている。



④遊離尾垂木

柱と柱のあいだの位置で丸桁を支える架構のアイデアは、和様にはなく、禅宗様では柱上の組物と同じものをを用いる。しかし浄土寺浄土堂は、組物と異なる別の方法で丸桁を支持している。この部材を遊離尾垂木という。

源平の戦いで焼失した東大寺再興の責任者(大勧進)であった俊乗坊重源は、まず、西日本の各地に「別所」を経営した。その数は20にも及ぶという。浄土寺は現存する唯一の「別所」である。重源が率いた工匠集団は、「大仏様」と呼ばれる独特の様式をもつ建築を生み出した。この様式は、宋から導入された新しい様式で、古代の和様とさまざまな点で異なる特徴をもっていた。これを浄土寺浄土堂に沿って見ていこう。

浄土寺浄土堂は、東面する方三間の阿弥陀三尊を祀る仏堂。柱間はすべて20尺ずつ総間で方60尺という、三間堂として破格の規模をもつ大仏堂である。内観は、

60尺四方いっばいに、三重に重ねられた梁とその上に立つ束で構成された力強い架構が見渡せる(1)。その中央に、丈六の迫力のある阿弥陀、勢至、観音の三像が立っている。この仏堂の特徴は、構造体そのままの内観の魅力をつくり上げていることである。円形の断面をもつこれらの梁とその上に立つ束は、大仏様以外に見られない独特のもの(2)。組物は、和様のように柱頂に載るのではなく、柱上部を貫く数段の「挿肘木」(3)によって構成される。柱に仕口をうがう工法は、組物の大きさに比べて太い柱が必要になる。柱が太いため柱間寸法を大きくとることが可能になるから、「挿肘木」の組物

は大柄な仏堂に似合う架構法である。斗は飛鳥様式と同じく皿斗を用いることも特徴的である。垂木は隅だけを扇垂木とする「隅扇垂木」を用い、垂木の鼻に横板(鼻隠板)をあてて垂木木口を隠す。いずれも大仏様の特徴である。柱間の中央で丸桁を支える「遊離尾垂木」(4)は、柱の前方に丸桁を送り出して支える組物と同じ働きを、柱のない位置で、組物とは別な仕掛けで実現しようとする。同様の部材は、身舎柱筋の上部にも設けられ、母屋桁の垂下を防いでいる。大仏様だけに見られる大きな特徴であり、和様にはなかった発達した架構法のアイデアである。

VI ビザンティン建築

330年、ローマ皇帝コンスタンティヌス大帝は首都をコンスタンティノポリス(現在のイスタンブール)に移し、混乱が続いたローマ帝国の復興を図ろうとした。その後、コンスタンティノポリスは東ローマ帝国(ビザンティン帝国: 395-1453)の首都となり、ローマとは異なった文化を成熟させていった。この東ローマ帝国の建築を総称して、「ビザンティン建築」と呼ぶ。東ローマ帝国では、ローマの政治体制や法律等を継承しつつも、キリスト教を国教として定めたため、ビザンティン建築は教会堂を中心に発達することになった。また、東ローマ帝国はオリエント地方を拠点としていたため、石材・木材ともに乏しく、レンガ造建築の構築技術が発達したと同時に、レンガ壁面を飾るスタッコ、モザイク、壁画等の装飾技術が発達した(①)。ビザンティン建築の最初の課題は、矩形平面のバシリカ式教会堂に、いかにしてドームを架けるかにあった。そこで考案されたのが、矩形平面をいくつかの正方形に分割し、それぞ

れにドームを架ける方法であった。ハギア・ソフィア(アヤ・ソフィア)(P.83)では、中央に直径32.6mという巨大なペンテンティヴ・ドームを架け、その前後には半円ドームを、さらにその周囲に大小のドームを架けることによって、バシリカ式と集中式の融合を果たした。そして、この方法は、ビザンティン建築の独特の手法となった(②)。

東ローマ帝国は、1000年以上にわたり続いたため、ビザンティン建築も長いあいだ建てられつづけた。しかも、東ローマ帝国のキリスト教は、帝国の崩壊後も、ギリシア正教、ロシア正教などに分かれて存続したため、その影響は帝国の歴史よりも長く、しかも広範にわたることになった。そのため、地域色豊かな建築も生じ、ロシアでは、タマネギ形をした木造ドームをもった教会堂(③)の流行を生んだ。また、十字軍の遠征を通して、中世の西ヨーロッパ社会にも、多大な影響を及ぼすことになった。



①サン・ヴィターレ
(526-547年頃、ラヴェンナ、イタリア)
直径17mのドームを中心に、2階建ての側廊を周囲に配した八角形聖堂。内部は大理石とモザイクによって、華美に装飾されている



②サン・マルコ聖堂
(1063-90年頃、ヴェネツィア、イタリア)
中期ビザンティン建築の代表作(左)。中央のドームの周囲に、やや小さなドームが架けられた空間が付いたギリシア十字形平面を中心とし、さらに小さなドームで覆われたナルテックス等の空間が付加されている(左下)。内部は、金箔、ガラス、モザイクで装飾されている(上)



③聖バシリウス大聖堂
(1555-61年、17世紀改築、モスクワ)
中央の尖塔型ドームの周囲に八つの塔状礼拝堂が付加された平面構成をとる。17世紀にドームがタマネギ形に改築され、多彩なタイル張りとなった

ドームの種類

正方形平面の隅部に板石(スキンチ)を架け渡し、多角形平面とすることを繰り返し、全体を円形平面および球体に近似させたドームを、スキンチ・ドームと呼ぶ。大規模な建物になるとスキンチに必要な巨大な板石の入手が困難となるため、板石の代わりにアーチでつづいたコーン状のトロンプを用い、トロンプ・ドームとなる。さらに技術が発展し、まずは正方形平面に内接するドームをつくり、その上部に正方形に内接する円からなるドームを架けるペンテンティヴ・ドームが完成する。



スキンチ・ドーム



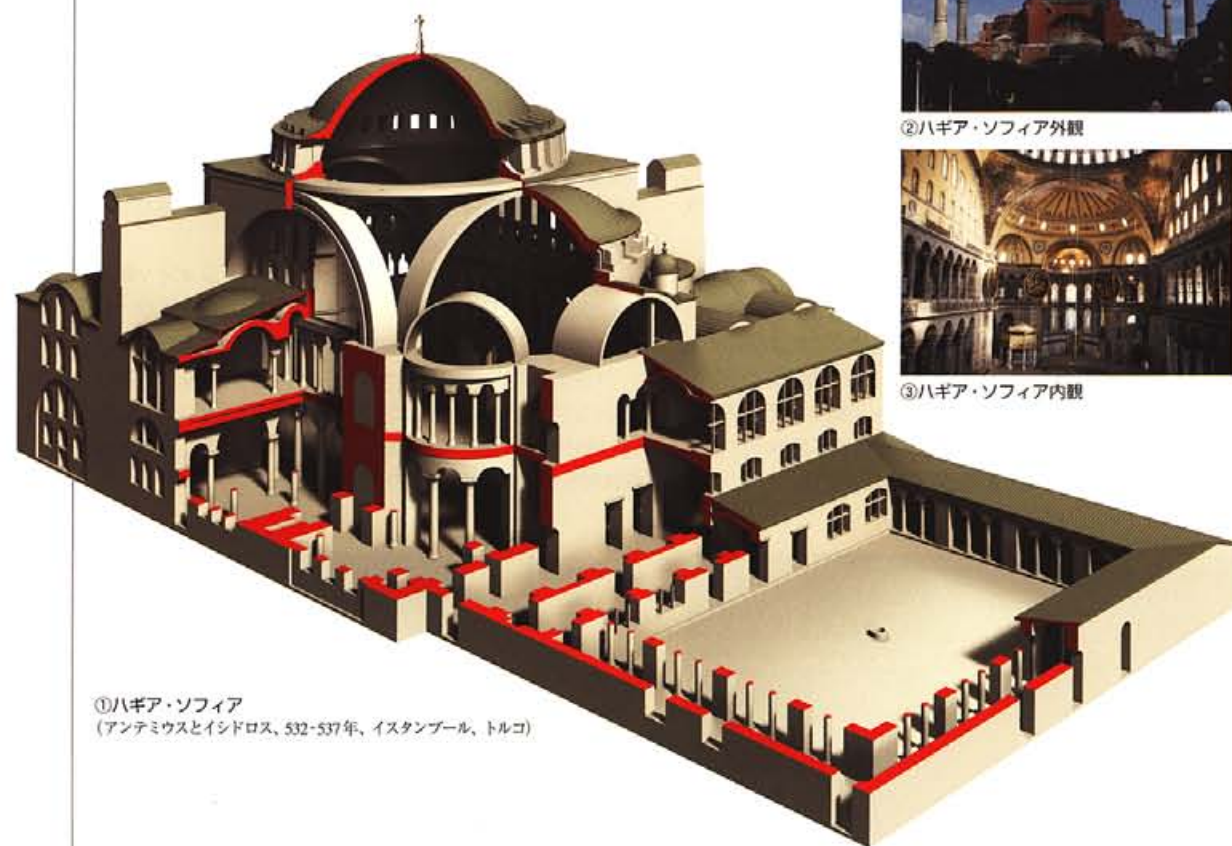
トロンプ・ドーム



ペンテンティヴ・ドーム

Close-up

ハギア・ソフィアの受難



①ハギア・ソフィア
(アンテミウスとイシドロス、532-537年、イスタンブール、トルコ)



②ハギア・ソフィア外観



③ハギア・ソフィア内観

ハギア・ソフィア(アヤ・ソフィアとも呼ばれる)は、ビザンティン建築を代表する大モニュメントである。現在は、博物館となっているが、この建物は、さまざまな受難を乗り越えて、現在に往時の姿を伝えている。

この建築のはじまりは、ローマ帝国のコンスタンティノポリスへの遷都直後にまで遡る。350年頃、遷都を行ったコンスタンティヌス大帝の息子のコンスタンティヌス2世(在位:337-340)の手によって、教会堂の建設が開始され、360年に献堂された。この最初の建築に関しては、詳細は不明であるが、ローマ風のバシリカ形式をとった木造屋根の建築だったと推定されている。しかし、この建築は、404年にコンスタンティノポリス主教アンネ・クリュソストモスの追放にともなう騒乱の際に焼失する。その後、テオドシウス2世(在位:408-450)の治世下の415年に再建されるが、この建物も532年のニカの乱(市民の暴動)で焼失してしまう。

しかし、ニカの乱を鎮圧したユスティニアヌス1世(在位:527-565)は、すぐに聖堂の再建を開始した。現存する聖堂は、この時に建てられたものである。聖堂は、それまでに例を見ない巨大なもので、最新の方法で建てられた。この建築の設計を担当したのは、アンテミウスとイシドロスであった。2人とも、同時代の資料には技師と記されており、建築に関しては未経験であったものの、物理学と幾何学に精通した人物であった。ここには、これまでにない建築をつくらうとするユスティニアヌス1世の意図が感じられる。工事は、わずか5年11か月という短期間で終了し、537年12月27日に献堂式が執り行われた。新しい聖堂は、ドームと半ドームの組合せでできており、幅32.6m、長さ80m、高さ55mの大空間を覆う大建築となった。この壮大な教会堂は、市民を圧倒したことであろう。しかしその20年後に地震に見舞われ、その影響でドームの崩壊をはじめ、ほとんどが崩落してしま

う。この惨事にあってもユスティニアヌス1世は、ただちに再建工事をはじめ、4年半の歳月を費やして、562年に修復工事が完成した。さらにこのドームは、989年、1346年に崩落し、そのたびに修理が行われた。この建築の受難は、これだけではなかった。1453年、コンスタンティノポリスを占領したオスマン帝国のメフメト2世(在位:1444-46および1451-81)は、コンスタンティノポリス総主教庁から大聖堂を没収し、モスクに転用した。その際十字架が撤去され、ミフラーブ(メッカの方向を示すニッチ)とミンバル(説教壇)が新たに建造された。と同時に、外部には4本のミナレット(塔)が立てられた。また、偶像崇拝を否定するイスラム教徒によってキリスト教の壁画ははぎとられた。近代になって、ハギア・ソフィアは、これまでの経緯や宗教的問題とは分離して、国の文化遺産として活用されることになり、1935年、アヤ・ソフィア博物館として公開され、現在にいたっている。

XII バロック建築

16世紀初頭、サン・ピエトロ大聖堂の建替えが行われた(前頁)。キリスト教徒にとって、これは長年の夢であり、4世紀以降、長いあいだ用いられてきた木造の教会堂に代わって、キリスト教の拠点としてふさわしい、新しく、壮大な建築が求められた。この大事業は、建築界ばかりでなく、世の中にも大きな変化を及ぼすことになった。教皇レオ10世(在位:1513-21)は、財源確保のために、免罪符の販売を開始した。これに対して、純粋にキリストの教えに立ち返ろうという動

きが興り、宗教改革につながっていった。

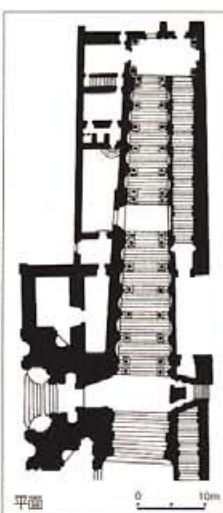
バロック建築は、こうした動きの中で生じた建築様式で、16世紀末期にイタリアで発生し、17世紀から18世紀前半にかけて、ヨーロッパ各国で展開された。ちょうどこの時期は、絶対王政の全盛期でもあり、権力者は自らの権力を誇示するがごとく、競って華麗なバロック様式の邸宅を建設した。これらバロック建築は、それまでの建築と比較して、施主には莫大な財力が要求され、建築家にもすぐれた才能が必要とされた。その



①サン・ピエトロ広場
(G.ベルニーニ、1656-67年、ローマ)
長径200m、短径165mの楕円形広場。周囲は高さ18.3mのトスカナ式円柱285本、角柱88本を4列に並べたコロネードで囲んでいる



②スカラ・レジア
(G.ベルニーニ、1663-66年、ヴァチカン宮殿、ローマ)
サン・ピエトロ広場の右側下からヴァチカン宮殿に入る正式玄関(左)。階段の傾斜を先ずぼろにする事で、透視画法(パースペクティブ)の効果を利用し、実際よりも長大壮麗に見せようとしている(右)



③サン・カルリーノ聖堂
(F.ボロミーニ、1638-46年、ローマ)
凹凸のある曲面でできたファサードが印象的。聖堂内部は、楕円形のペンデンティヴ・ドームが架けられている

ため、バロック建築が用いられたのは、宗教改革を乗り越えたキリスト教建築や国王・大貴族の邸宅に限られた。バロック建築は、ダイナミックで劇的な効果を求めた。そのため、巨大なスケール、圧倒的なマッサ、壮大なヴィスタ、曲線・曲面の多用、不規則な形態の使用、複雑に入り組んだ空間、過剰なほどの装飾などが特徴となっている。

バロック建築の展開も、ルネサンス建築同様に、国ごとに異なっていた。イタリアのバロック建築は、サン・ピエトロ大聖堂の建替え計画にはじまるといってよい。実現はされなかったものの、ミケランジェロの計画案には、すでに大オーダーを用いた正面が見られ、バロックの兆しを感じられる。その後、ベルニーニ(1598-1680)は、楕円形平面のサン・ピエトロ



④トレヴィの泉
(N.サルヴィ、1732-62年、ローマ)
バラツォ・ボリの両壁を利用して建設された噴水。中央の彫刻は海神ネプチューンの戦車とそれを誘導する2人のトリトンがモチーフとなっている



⑤ヴォー・ル・ヴィコントの城館
(ル・ヴォー・ル・ブラン・ノートル、1657-61年、フランス)
ルイ14世の大蔵大臣ニコラ・フーケの邸館。ル・ヴォーが全体計画、ル・ブランが室内装飾を担当。玄関ホール、楕円広間を軸とする厳格なシンメトリ平面を採用し、外観は大オーダーを使用しながら、左右のパヴィリオンで全体のバランスをとっている。ル・ノートルによる整形庭園は、フランス式庭園として他国の造園にも大きな影響を与えた



⑥カールスビルヘ
(J.B.フィッシャー・フォン・エルラッハ、1716-33年、ウィーン)
さまざまなバロック的モチーフをふんだんに取り入れた作品。フィッシャー・フォン・エルラッハは、ドイツ最初の建築家とされる図集『歴史的建築の構想』(1721)を著し、強い影響力を持った

広場(①)を計画し、この段階でイタリアのバロック建築が完成した。ベルニーニは劇的な効果を狙った空間構成を得意とし(②)、高い名声を得、その後、フランス王から招聘され、パリでルーヴル宮の改築工事に携わった。ベルニーニと双璧をなしたのが、ボロミーニ(1599-1667)で、曲面や曲線を巧みに操る造形で、人々を驚かせた(③)。バロック様式は、ローマから各地に広まると同時に、都市景観を飾るさまざまなタイプの建築にも用いられていった(④)。

フランスでも、イタリアの影響を受けて、新しいタイプの建築が現れはじめた。たとえば、フランソワ・マンサール(1598-1666)はオーダーを巧みに操り、また、自らの名前が冠されて呼ばれる腰折れ屋根(マンサード屋根)を多用するなど、独自



⑦ザンクト・ヨハン・ネボムク聖堂
(アザム兄弟、1733-50年、ミュンヘン、ドイツ)
彫刻家の兄と画家兼建築家の弟のアザム兄弟が、自費で自宅の隣に建造した教会堂。光と色彩の効果を利用し、幻想的な空間を確立しているドイツ・バロックの代表作

フランク・ロイド・ライト



①ロビー邸
(F.L.ライト、1909年、シカゴ、アメリカ)
大草原様式の到達点に達した作品。深く張り出した庇、壁面を区切る縦線等、水平線を強調した立面が特徴。内部は最小限の間仕切りしかなく、自由で流動的な空間をつくり出している



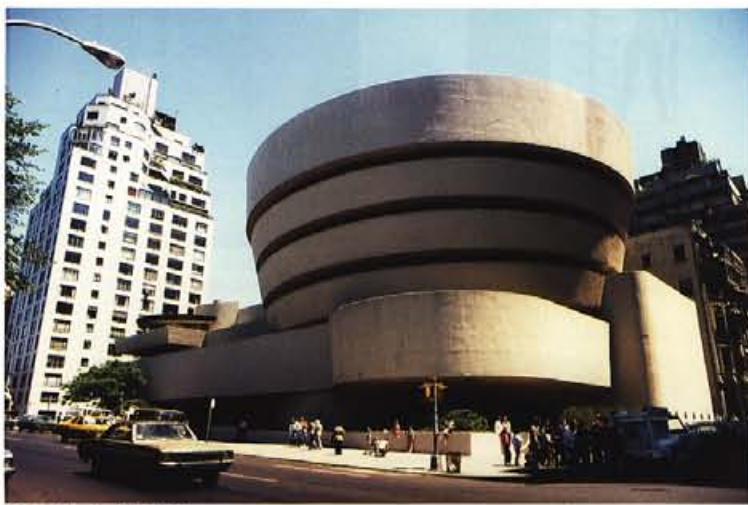
④ジョンソン・ワックス社事務所
(F.L.ライト、1939年、ウィスコンシン州、アメリカ)
54本の特異な形態の柱を用いた事務所建築。柱は上にいくほど広がり、天井では円状となり、円と円の隙間には耐熱ガラスが張られ、そこに照明器具が組み込まれている



②ミラード邸
(F.L.ライト、1923年、カリフォルニア州、アメリカ)
透かし細工をほどこしたコンクリート・ブロックを壁面意匠に取り入れた建築。1920年代のライトは、質素で安価なコンクリート・ブロック製の住宅の開発に専心していた



③落水荘(カウフマン邸)
(F.L.ライト、1936年、ペンシルバニア州、アメリカ)
コンクリートのバルコニー・テラスをキャンティレバーで滝の上に突き出させ、自然の風景と近代的な材料の調和を達成させている



⑤グッゲンハイム美術館
(F.L.ライト、1943・46年設計、1959年建造、ニューヨーク)
エレベーターで最上階まで行き、そこから螺旋状斜路を下りながら壁に掛けられた絵画を見るという独特の構成の美術館。斜路の全長は400mに及ぶ

アメリカ大陸を代表する近代建築家が、フランク・ロイド・ライト(1867-1959)である。かれは、シカゴ派の建築家ルイス・サリヴァンのもとで修業し、その後、シカゴ近郊で、住宅建築を多数手がけ、アメリカの風土に根づいた独特の住宅様式を築き上げ、アメリカばかりでなく、ヨーロッパでも作品集を通じて、その名をとどろかせた。ライトははじめ、シングル・スタイル(P.123)を試みていたが、やがて、低層で、緩勾配の屋根、深い軒、流動的な平面計画を特徴とする住宅スタイルを確立し、それは大草原様式(プレーリー・スタイル)と呼ばれるようになった(①)。

また、ほぼ同じ頃、ユニティ・テンプル(1905)とラーキン・ビル(1905、1950取り壊し)を設計するが、両者とも新しい視点によって建てられた建築であると、高い評価を得た。

華やかなデビューを飾ったライトであったが、1914年に、事務所兼住居であったタリアセンを火事で失い、さらにスキャンダルにより社交界から追放されてしまう。帝国ホテル(P.51)の建設のために来日したのは、この時期であった。経済的に困窮していたライトは、装飾模様を型付けしたコンクリート・ブロックの開発に活路を見出し、透かし細工やマヤ装飾をモチーフとしたブロック製の建築を

建て(②)、それがライトの中期の作品の特徴となった。

晩年のライトは、さまざまなタイプの建築を、独創的手法で設計した。滝の上にコンクリートのテラスを張り出しキャンティレバーで支えたダイナミックな構成の落水荘(③)、マッシュルーム形の柱やワッフル・スラブを用いたジョンソン・ワックス社事務所(④)、螺旋状の斜路を利用したグッゲンハイム美術館(⑤)等が代表作として挙げられる。いずれも前例のない新しい建築であったため、ライトの建築はほかのモダニズム建築とは異なるものと解釈され、しばしば「有機的建築」と称されている。

XI アール・デコとスカイスクレイパー

1925年、パリで「現代装飾産業芸術国際博覧会(アール・デコ展)」が開催された。この展覧会の目的は、最新の工芸品を展示し、それを世に広めようとするものであった。商工業界のスポンサーシップのもと、盛大な博覧会となるはずであったが、ドイツ、アメリカなどは参加しなかった。博覧会の目玉は、パリの四つのデパートのパヴィリオン(①)とその展示品であった。これら建築は、流線形やジグザグ模様、階段状のモールディング(線形)等の幾何学模様を用いた装飾が特徴的であった。それらは、展覧会名にちなんで「アール・デコ」と呼ばれている。合理主義・機能主義に基づいたモダニズム建築が主流となりつつある中、装飾的な建築は、ヨーロッパではなかなか受け入れられず、一部の富裕層に趣味的に用いられた程度であったが、富裕層の余暇として定着しつつあった豪華客船のインテリアに用いられるようになり、さらには海を渡って、ニューヨークのスカイスクレイパー(超高層建築)でさかんに

用いられるようになった。

ニューヨークでは、シカゴ派の影響を受けて、高層建築が数多く建てられるようになり、1910年代初頭には高さ200mを超え(②)、1920年代には高さ競争はますます白熱していった(③〜⑤)。1929年の世界恐慌で、この動きは下火となるが、ニューヨークの景観は大きく変貌した。また、ちょうどその頃、ヨーロッパの建築界をリードしてきたモダニズム建築家たちが、母国を追われ渡米してきたため、アメリカの建築界は一気に活気づいた。ル・コルビュジエが全体計画を行った国際連合本部(1950)、都市内の高層建築の取扱い方の典型を示したリーヴァ・ハウス(SOM、1952)、ミースがガラスの摩天楼案を実現化したシーグラム・ビル等が、ニューヨークにおけるモダニズム建築の嚆矢となり、これによってアメリカにもモダニズム建築が定着するばかりでなく、世界の建築界をリードする立場となった。



①ボン・マルシェ館(L.H.ボワロー、1925年、現存せず、パリ)
アール・デコのパヴィリオンの一つ。正面の階段状のデザインや軒先のジグザグ模様は、アール・デコの典型的な要素

インターナショナル・スタイル

さまざまな前衛的芸術運動によって、モダニズム建築を受け入れる土壌が少しずつでき上がってきた。モダニズム建築を、普遍的な建築であり、世界共通の概念として広めようとする動きが現れてきた。その最初の試みは、1925年に、グロピウスがバウハウス叢書の第1巻として刊行した「インターナショナル建築」と題した一冊であった(P.135)。この中でグロピウスは、「科学と技術は国境のない世界共通のものであり、これからの建築は科学と技術に基づいて建てられるから、未来の建築は必然的に世界共通の形態となる」と主張した。1932年には、ニューヨーク近代美術館で「近代建築国際展」が開催され、「インターナショナル・スタイル(国際様式)」という言葉が正式に用いられ、その後、国際的な建築が探求されていくようになる。この展覧会を企画したのが、アメリカの建築史家ヘンリー・ラッセル・ヒッチコック(1903-87)と建築家フィリップ・ジョンソン(1906-2005)であった。かれらの考えは、科学技術の進歩が、それまでの土着性または地域性を超越した普遍的な建築を生むという信念に基づいていた。これに懐疑的になるのは、ポスト・モダンを意識しはじめる1970年代のことで、それまでは、モダニズム建築は神格化されていた。



②ウールワース・ビル
(C.ギルバート、1913年、ニューヨーク)
52階建て、高さ241mという当時もっとも高かったゴシック様式のスカイスクレイパーで、ニューヨークのスカイスクレイパー建設のきっかけとなった



③クライスラー・ビル
(W.V.アレン、1931年、ニューヨーク)
アール・デコのスカイスクレイパーの代表作。77階、319mで、建設当時、世界一の高さを誇った。頂部には装飾的なステンレス製の37.5mの尖塔が付き、それ以外にも各所に優雅な装飾がほどこされている



④エンパイア・ステイト・ビル
(R.シュリーヴ+W.ラム+A.ハーモン、1931年、ニューヨーク)
102階、381m、斜線制限によるセットバック方式の典型的なデザインの高層ビル



⑤ロックフェラー・センター
(R.フッド+W.ハリソン+M.アブラモヴィッツ、1940年、ニューヨーク)
8街区に14棟のビルを建てるという総合開発。スカイスクレイパーの高さ競争の次の段階の開発と位置づけられる